

# 博物館 Dictionary No.192

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせい ち しんかん きんこう てんじ ぶつぐ  
平成知新館1F-5(金工)に展示されている仏具について勉強してみよう。

## け まん 華鬘 ほとけ かざ ぶつぐ 仏の世界を飾る仏具



図1 インドの大菩提寺にて

8月はお盆の季節。お寺さんにお参りに行く方もいらっしゃることでしょ。お寺の中にはいろいろな道具があります。仏像の前には大きい机が置かれ、そのうえには花をいけるけびょう華瓶や、お香をたくこうろろう香炉、蠟燭をさすしょくだい燭台などが乗っています。柱には細長い幡(はた)

や、丸い形をしたけまん華鬘というかざ飾りがかけられていることがあります。お堂の軒先でのきさきわにぐち鰐口を鳴らしたり、おおみそかじょやかね大晦日に除夜の鐘をついたりしたことはありませんか?このようにぶつきょう仏教で使われる道具を「ぶつぐ仏具」といいます。ぶつぐ仏具にはいろいろな種類がありますが、主なものは、ぶつぞうぶつどうの中をかざ(しょうこん)庄嚴する「しょうこんぐ庄嚴具」、お坊さん(そうりょ)が使う「そうぐ僧具」、たたい音を鳴らす「ぼんおんぐ梵音具」に大きく分けられます。今回はしょうこんぐ庄嚴具のひとつ「けまん華鬘」についてご紹介します。

「けまん華」ははな花、「けまん華鬘」はあ植物のつるを編んで頭につけたかざ飾りのこと。つまり「けまん華鬘」とは、あ花を編んで作ったかざ飾りという意味です。ぶつきょう仏教が生まれたインドでは、昔からじっさい(せい)か(生花)に糸を通して連ねたはなかざ花飾り(レイ)を首などにかけて身をかざ(しょうかん)飾る習慣がありました。それがぶつきょう仏教では、ぶつどうぶつどう(お堂や仏塔)にささ(ほとけ)仏の世界を美しくかざ(こうい)飾るといふ行為になったのです。『毘尼母経』という古いおきょう(きょう) (4~5世紀に成立)では「けまん華鬘は人が身に着けるのではなく、ほとけ(ほとけ)ぶつどう(ぶつどう)かざ(かざ)に使うのがよい」と書かれています。最近インドに行ったときのこと、おしゃか(しゃか)さま(さま)が悟りを開いたぶつだ(ぶつだ)が(マハーボディ寺(大菩提寺))では、多くの人が



図2 インド大菩提寺の仏塔にかけられていたレイ

